

希望レベル調査を基にした進路選択能力の育成

～キャリア教育としての「職場体験活動」と連動させた授業実践を通して～

Training course selection ability based on hope level survey

～ Through class practice linked with "workplace experience activities" as career education ～

橋爪 快¹

橋本 治²

Kai HASHIZUME

Osamu HASHIMOTO

要旨

「職場体験活動」の体験先の希望調査時に、それぞれの体験先に対する希望の強さの度合いを測る「希望レベル調査」を作成し、実施した。また、「希望レベル調査」を基に、「職場体験活動」での学習内容を基にした職業選択に関わる授業を開発し、実践した。

希望レベル調査は平均値が、第1希望がほぼ4から始まり、第5希望でほぼ2となる右肩下がりのグラフとなった。そこで第1希望が3以下で始まる生徒や、第1希望が4でも第2希望で2以下に落ちる生徒を、進路選択能力に課題のある生徒として目星をつけた。授業実践はアンケート調査の全8問の質問項目の内、①～⑤が授業前後で上昇し、多重比較の結果、質問①で有意であった。職場体験活動前と授業後では全ての項目が上昇し、質問③で有意であった。個別のケースを見てみると、アンケート調査の結果から、希望レベル調査によって、進路選択能力に課題がある可能性のある生徒に目星を付けられることが考えられた。

Abstract

"Hope level survey" to measure the degree of strength of hope for each experiencing destination was prepared and implemented at the time of the hope survey of "experiential experience of the workplace". Also, based on the "Hope Level Survey", we developed and practiced classes related to occupation selection based on learning contents in "Workplace experience activities".

The hope level survey was averaged, with the first hope starting at nearly 4, and the fifth hope was nearly 2 with a second downward slope. Therefore, students whose first hope begins with 3 or less, or students whose first hope is 4 or less and 2 or less in second hope, have gone on as a student with a problem in career selection ability. In the class practice, ① ~ ⑤ among the question items of all 8 questions in the questionnaire rise increased before and after the class, and as a result of the multiple comparison, the question ① was significant. Before and after the workplace experience activity all the items climbed and were significant at question ③. Looking at the individual case, from the result of the questionnaire survey, it was thought that students with possibility of having a challenge in career selection ability could add a star by the desired level survey.

I. 課題と目的

2011年に中教審答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」が出版され、それに伴って『中学校キャリア教育の手引き』(文部科学省,2011)ⁱⁱが出版された。その中

1 岐阜大学大学院教育学研究科教職実践開発専攻教育実践開発コース

2 岐阜大学大学院教育学研究科

に示されている「基礎的・汎用的能力」の「キャリアプランニング能力」は、「働くこと」の意義を理解し、自らが果たすべき様々な立場や役割との関連を踏まえて「働くこと」を位置付け、多様な生き方に関する様々な情報を適切に取捨選択・活用しながら、自ら主体的に判断してキャリアを形成していく力」であるとされ、「社会人・職業人として生活していくために、生涯わたって必要となる能力」と位置付けられている。

この「キャリアプランニング能力」では、「選択」する能力がその要素とされている。また、新学習指導要領ⁱⁱⁱの総則ではキャリア教育について、「生徒が自らの生き方を考え主体的に進路を選択することができるよう、学校の教育活動全体を通じ、組織的かつ計画的な進路指導を行うこと」とされ、進路選択の必要性が分かる。さらに総則の解説^{iv}では、「自分自身を見つめ、自分と社会の関わりを考え、将来、様々な生き方や進路の選択可能性があることを理解するとともに、自らの意思と責任で自己の生き方や進路を選択できる」生徒が求められている。

キャリアや進路における選択する能力とは何か。町田・開本(2016)^vは大学生に行った調査によって、進路選択における自分の性格や能力および、自分に適した職業や企業について理解しているという「進路選択マッチング」、進路選択における自らの意欲と働く意思に関して、認知・理解しているという「進路選択モチベーション」、進路選択における志望対象の絞り込み技術・知識について理解しているという「進路選択スキル」の3要素を「進路選択能力」とした。

以上から、これからの時代に求められるキャリア教育で特に必要なことは、自らの生き方を考え進路を主体的に選択できる生徒を育てることだととらえた。そこで、この進路選択能力を高める方法を開発していきたいと考えた。本実践は町田らの定義を基に、職場体験先の選択に着目し職場体験活動と連動させた授業実践を行うことで、生徒の進路選択能力を伸ばし、自らの生き方を考え主体的に進路選択ができるようにすることを目的とする。

II. 方法

(1) 時期と対象

2018年度時点での岐阜県A中学校の通常学級2年生160名を対象に、職場体験活動に関わったの、アンケート調査と授業実践を行った。

表1 研究スケジュール

2018年3月(1年次)	・次年度職場体験先希望調査 ・希望レベル調査(学年160名)
2018年5月(2年次)	・研修前アンケート調査 ・希望レベル調査(学年160名の内、欠席者4名を除く156名)
2018年5月(2年次)	・職場体験(2泊3日, 学年160名)
2018年6月(2年次)	・授業前(研修後)アンケート調査 ・満足レベル調査(1学級40名の内、欠席者1名を除く39名)
2018年6月(2年次)	・授業実践(1学級40名の内、欠席者1名を除く39名)
2018年6月(2年次)	・授業後アンケート調査 ・満足レベル調査(1学級40名の内、欠席者1名を除く39名)

因みに、特別支援学級の生徒は通常学級の生徒と職場体験活動の内容が大きく違っていたので、今回は調査対象に含めなかった。

(2) 職場体験先に対する希望レベル調査の実施

A 中学校の職場体験活動は、5月9日から5月11日にかけて、2泊3日で行われた。「大阪府や淡路島を産業や文化など経済の観点から捉えて、様々な業種の職場訪問や漁村体験を行う事を通して働く人々の思いや働くことの意味を探って、自分の職業観を磨き、自分自身の生き方を見つめる。」ことを目的としている^{vi}。

個人が選んで訪問する「目的別企業研修」は5月10日に行われた。企業選択では13の企業等から第5希望まで選び、その理由を見て教員がどこに研修に行くかを判断する。ただし、教員の判断中に1つの企業がキャンセルになったため、実際は12の企業に研修に行った。

中学生の職場体験に対する希望の強さによって、事前学習の取り組み方や当日の学びに対する満足感、進路選択能力の変容に差が出ると考えた。そこで、このA中学校での職場体験先の希望調査に、山田(2011)^{vii}の研究を参考に希望レベル調査の方法を考えた。希望の研修先に対する、希望の強さの度合いの調査(以下「希望レベル調査」)を組み込んだ。4「とても行きたい」、3「行きたい」、2「少し行きたい」、1「あまり行きたくない」の4件法で行った(図1)。特に、希望した企業等の中でも、決定して実際に行くことになった研修先に対する希望レベルを、「希望レベル①」とする。職場体験の直前にも決まった研修先に対する希望レベル調査を行った。これを希望レベル②とする。また、研修後については授業実践前後に、実際に行った研修先の学びに対する満足感の度合いの強さの調査(以下「満足レベル調査」)を、4「とても充実した」、3「充実した」、2「少し充実した」、1「あまり充実していない」の4件法で行った。授業前(研修後)を満足レベル①、授業後を満足レベル②とする。

図1 「職場体験活動」の希望調査用紙の「希望レベル調査」

◇自分の希望と希望レベル、選んだ理由						
	記号	希望レベル				選んだ理由
第1希望		4	3	2	1	
第2希望		4	3	2	1	
第3希望		4	3	2	1	
第4希望		4	3	2	1	
第5希望		4	3	2	1	

※「希望レベル」とは、希望の強さの度合いです。当てはまる所に○を付けましょう。
4…とても行きたい 3…行きたい 2…少し行きたい 1…あまり行きたくない

通常の希望調査であれば、体験先がリストアップされ、生徒はその中行きたい研修先を選び、理由を書く。この状態では、生徒がどの研修先に一番興味をもっているのかという、相対的な希望の強さを見ることはできるが、それぞれにどのくらい興味をもっているのかは分からない。しかし、この希望レベル調査をすることで、生徒がそれぞれの研修先にどのくらい興味をもっているのかという絶対的な希望の強さを見ることができる。

多くの生徒はこの調査では、第1希望が4から始まり、3, 3, 2, 1などのように、緩やかに下がっていくと予想した。また、第1希望から3や2を選ぶ生徒は、職場体験活動についての興味が薄いことから、進路についての関心が低く、進路選択能力に何かしらの課題があるのではないかと考えた。

(3) 「職場体験活動」と連動させた授業実践

A中学校の2年生は2泊3日の職場体験によって、様々な職業人と関わっている。その中でもった職業に対する印象や学んだことを基に、牛崎(2000)^{viii}を参考に職業選択に関わる実践を表2のように行った。

表2 授業の活動の流れ

活動1	自分にとっての職業の選択規準を4つ考え、順位を決める。
活動2	考えた選択規準を基に、グループ交流や全体交流をし、なぜその選択規準を選んだのか、なぜその順位にしたのかを話し合う。
活動3	話し合いを基に、自分の選択規準を考え直す。
活動4	考えた選択規準を使って、提示された2つの職業についてレーダーチャートを作る。
活動5	活動を通して学んだことを振り返る。

研修の直前、授業実践の前後に『中学校キャリア教育の手引き』を参考に作ったアンケート調査を行い、事前事後の進路選択能力の変化を測った。このアンケート調査は、基礎的・汎用的能力の4つの要素を問うもので、特に町田・開本の定義と共通した内容の質問を各要素2問ずつ、計8問を引用・修正した。質問項目は表3のようにした。

表3 アンケート調査の質問項目

人間関係形成・社会形成能力	①	興味や関心がある将来の事について、その事に詳しい人と積極的に話したり、聞いたりしようと思えますか。(進路選択モチベーション)
	②	自分から役割や仕事を見つけたり、分担したりして、周囲と力を合わせて行動しようと思えますか。(進路選択マッチング)
自己理解・自己管理能力	③	自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、将来につなげようと思えますか。(進路選択マッチング)
	④	不得意な事や苦手な事でも、自ら進んで取り組もうと思えますか。(進路選択モチベーション)
課題対応能力	⑤	将来に分からない事やもっと知りたい事がある時、進んで資料や情報を集めたり、誰かに質問したりしようと思えますか。(進路選択スキル)
	⑥	目標があつて何かをする時、見通しを持って計画的に進めたり、そのやり方などの改善を測ったりしようと思えますか。(進路選択モチベーション)
キャリアプランニング能力	⑦	学ぶ事や働く事の意義について考えたり、今学校で学んでいる事と自分の将来のつながりを考えたりしようと思えますか。(進路選択マッチング)
	⑧	自分の将来について具体的な目標を立て、その実現のための方法を考えようと思えますか。(進路選択マッチング)

Ⅲ. 実践の様子

(1) 職場体験活動での様子

職場体験活動は、第1著者も同行し、直接生徒達の姿や反応を見聞きしてきた。

1日目の「学級別企業研修」で、全てオーダーメイドでモニュメントや家の部品などを作る企業に見学に行ったときには、授業学級の半数強が研修に行った。この企業に決まった時には、学級の生徒はどんな企業かよくわからず、あまり興味をもっていなかった。しかし実際に行ってみると、職人の技や拘り、出来上がっていく作品に心打たれて、「すげえ。」と、つい声が漏れていた。

2日目の「目的別企業研修」で大阪府警察に行った生徒は、交番の役割の説明の映像を見たり、110番が入ったときの対応をする通信指令室や、渋滞などの情報を司る交通管理センター

の見学をしたりした。なかなか車の話などは、生徒達にとってよく分からない所もあるようであったが、ガラスの向こうの情報が映し出される大きな画面などを興味津々で見ている姿が見られた。

2日目の夜の淡路島での「民宿の方と語る会」では、いくつかある職業人に対する質問の時間の中でも、最も生徒達が積極的に質問をしていた。その内容は、働くことのやりがいや大変さ、実際の収入など、生徒達にとって将来の自分に直接つながる、最も関心のある話題が多くあった。

3日目の「漁業体験」では、生徒達の降りてくる時の充実した顔が印象的であった。船から様々な海鮮物の入った箱を、積極的に降ろして、「何が入っているのだろう。」と、実際にタコなどに触って見ている姿が見られた。

他にも様々な活動があり、どれも生徒達にとっては初めて見聞きすること、体験することで、興味をもったり、楽しんだりしながら、充実した学びをしていた。

(2) 職場体験活動と連動させた授業実践での様子

授業実践では図2のワークシートixxiを使って活動を行った。生徒たちは活動1で考えた自分の選択規準について、活動2で積極的に話し合い、考え直していた。また、考えた選択規準を使って活動4で職業選択をする時には、真剣に考え、当てはめることができていた。表4を見ると、生徒Bは仲間と話し合う過程で、自分の選択規準よりもさらに大切な規準を見つけ出し、仕事を充実させる規準を新たに加えている。しかし、やはり最初に考えたように、現実的な規準は特に必要と考えたようだ。

図2 授業実践のワークシート

表4 生徒Bのワークシートの記述内容

生徒	活動	選択規準				振り返り (活動5)
		1位	2位	3位	4位	
生徒A	活動1	勤務時間	給料	衛生面	残業時間	色々な視点から自分に合った職業を選ぶことで自分が楽しめたり、達成感をえることができる。 また、生活面に支障がでないように安定な給料面とかでも選んでいけばいいと思っている。
	活動3	勤務時間	給料	人間関係	楽しさ	

多くの生徒は生徒Bのように、規準そのものや順位が少し変わった、という生徒が多く、大きく変わった、まったく変わらなかった、足りない規準を増やせたという生徒は少なかった。

活動2で自由に書くスペースをワークシートに作ったが、多くの生徒は書き込みが少なく、板書の写しのみや、白紙の生徒もいた。グループでの話し合いは活発に行われていたことを考えると、生徒にとってはその場で話し合っ考えることが重要なのであって、書いて記録に残したり、整理したりすることは重要なのではないと考えられる。

IV. 結果と考察

(1) 職場体験先に対する希望レベル調査の結果と考察

望調査時の希望レベルの平均は図3のように、第1希望が3.888と、ほぼ4に近い数値から始まり、3.425, 3.000, 2.646, 2.224と、第5希望で2に近づくような右肩下りの直線的なグラフとなった。ここから、第1希望が3以下から始まる生徒や、第1希望は4でも、第2希望で1や2を選ぶ生徒に、職場体験へのモチベーションや進路選択能力に課題がある可能性がある生徒として目星を付けることができた。

学年全体の決定した研修先の、希望調査時の希望レベルと、体験直前の希望レベルを比較すると、体験直前の方が、平均値が下降していた(図4)。これは、自分の研修先についての調べ学習を行って行く中で、最初に思っていた企業と違うという現実を捉えたことで下がったものだと考えられる。この結果は、授業実践をした学級でも同じように、希望調査時から体験直前にかけて希望レベルが下がっていることが分かる(図5)。理由も同様だと考えられる。

授業学級の満足レベルを見ると、大阪研修後の満足レベルは、授業前後共に、希望レベル①②よりも高くなっている。調べ学習で現実をとらえ、研修先に対する期待感が下がったが、実際に見聞きしたり、体験したりしてみると、思っていた以上にそこでの学びについて「良かった。」と満足感を感じることができたのだと考えられる。

(2) 職場体験活動と連動させた授業実践の結果と考察

アンケート調査の各質問項目について授業前後で比較すると、質問①～質問⑤までが上昇し、多重比較の結果、質問①で1%水準の有意差が出た(図6)。質問⑥～⑧は下降しているが、有意差は出なかった。この実践で、興味や関心がある将来の事について、その事に詳しい人と積極的

図3 希望調査時の希望レベルの平均

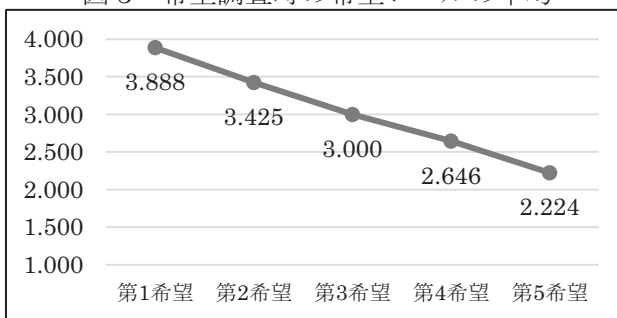


図4 希望レベルの比較 (学年全体)

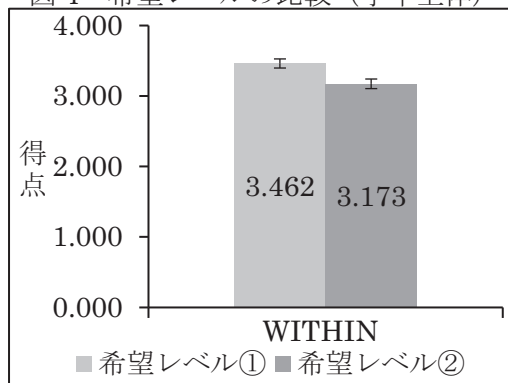
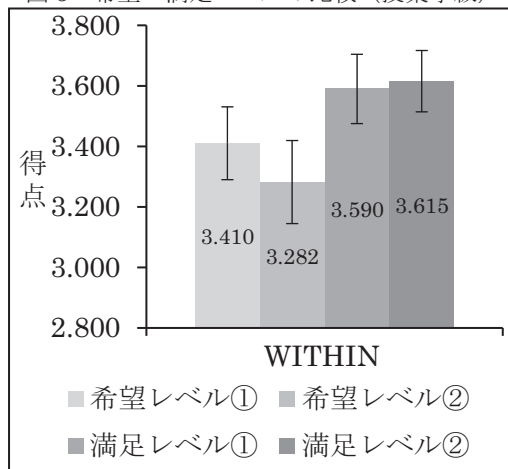


図5 希望・満足レベルの比較 (授業学級)



に話したり、聞いたりしようと思える進路選択の能力が上がるということが示唆された。班や学級全体での話し合いの活動を基に、自分の選択基準を考え直したことが影響したと考えられる。

研修前から授業後では、質問③で 1%水準の有意に上昇した。研修前から授業後では、自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、将来につなげようとする進路選択の能力が上がるということが示唆されたと言える。職場体験活動の学びを基に選択基準を考えしたことによって、職業や働くことに対して、自分自身がどんなことを求めているのかという自己理解が必要になり、それを基に選択基準を決め、職業選択の活動を行ったためだと考えられる。因みに、質問③は研修前から授業前（研修後）でも 5%水準で有意差が出ている。

また、研修前から授業後で比較すると、全ての項目で平均値の上昇が見られた。職場体験活動と本授業実践を連動して行うことで、進路選択能力全体が上昇すると考えられる。新学習指導要領では、「組織的かつ計画的な進路指導」を行う様に求められているが、キャリア教育を計画的に行うことが有効であるということが確認できたと考えられる。

図 5 を見ると、満足レベルも授業前後で若干上昇している。これは、研修の学びを基にした授業を行ったことによって、研修の学びに新たな意義を感じた、あるいは意義を再確認した生徒も出てきたことが理由として考えられる。

図 6 授業学級のアンケート調査結果

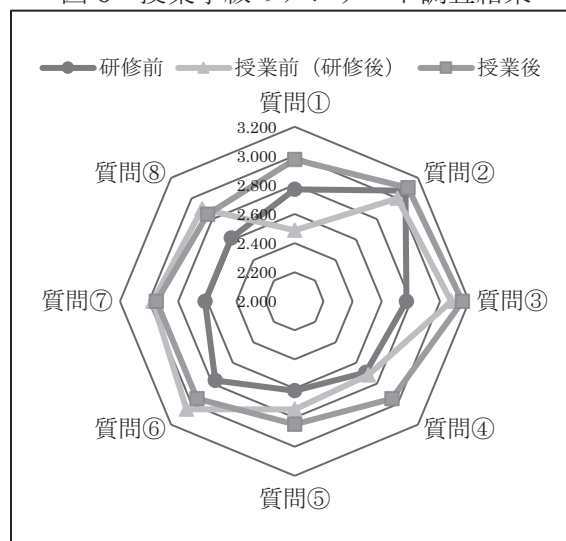


表 5 多重比較 (Holm 法) で有意に上昇した質問項目

質問内容	水準の組	調整 p 値
質問①：興味や関心がある将来の事について、その事に詳しい人と積極的に話したり、聞いたりしようと思えますか。	研修前 - 授業前 (研修後)	ns
	研修前 - 授業後	ns
	授業前 (研修後) - 授業後	.001 **
質問③：自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、将来につなげようと思えますか。	研修前 - 授業前 (研修後)	.033 *
	研修前 - 授業後	.008 **
	授業前 (研修後) - 授業後	ns

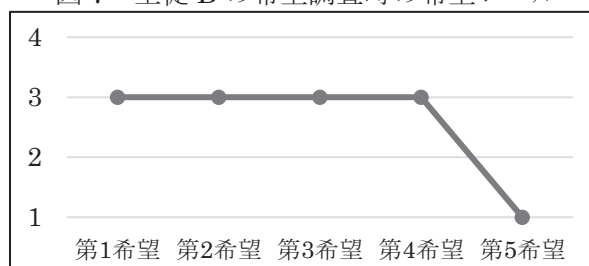
*p<.05 **p<.01

(3)個別のケース 生徒 C について

生徒 C は希望調査時の希望レベル調査で、第 1 希望を 3 にしていた (図 7)。第 2 希望以下は 3, 3, 3, 1 となっていた。そこでこの生徒 C に進路選択能力に課題がある可能性があると目星をつけ、注目して関わった。

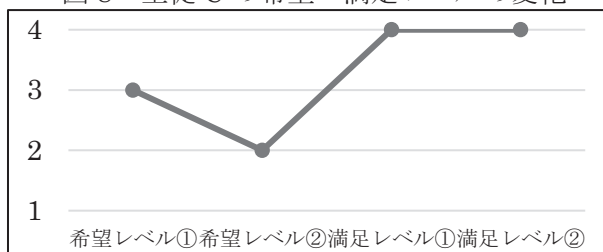
この生徒の希望レベル①は第 4 希望の 3 で

図 7 生徒 B の希望調査時の希望レベル



あった(図8)。その希望レベルが、希望レベル②では2に一度下がっており、その理由に「気が進まない。」と書いている。1番行きたかったところではなく、むしろ希望順位は低い所であったこと、調べてみて思っていたような所ではなかったことなどが考えられる。しかし、満足レベルは①、②ともに4となっている。その理由として、どちらも「職場体験ができた。」と書いている。

図8 生徒Cの希望・満足レベルの変化



この生徒は、最初はあまり興味をもっておらず、調べたり学んだりするほどに期待できなくなっているが、実際の研修を通していって学びが良かったと思うことができていたようだ。研修の場では、接客・サービス業であるのに中々声が出ておらず、表情の変化もあまりないように見えた。しかし、心の中ではよく考えて学んでいたのだと考えられる。

アンケート調査について、生徒Cは明らかに他の生徒よりも低い数値を示している(図9)。希望レベル調査で目星をつけた生徒だが、やはり他と比べて進路選択能力に課題があるように考えられる。

図9 生徒Cのアンケート調査結果



この生徒は授業前後で比較すると、質問③で上昇している。選択基準を考え、実際の職業で当てはめて考えることで、自分はどんなことをしたいのかなどを考える必要があり、自己理解の必要性に気が付いたと考えられる。しかし、質問⑦、⑧で下降している。質問⑦については、授業内容が「職業」ということや「職場体験での学び」を強く意識していたため、生徒Cの中で学校の学びと離れて考えてしまったことが考えられる。質問⑧については、具体的に職業を選ぶことについて考えたことで、職業選択やそのための取り組みに難しさを感じたと考えられる。この質問⑦、⑧については、授業学級全体の結果でも平均値の下降が見られた。理由としては生徒Cと同じことが考えられる。

表6 生徒Cのワークシートの記述内容

生徒	活動	選択規準				振り返り(活動5)
		1位	2位	3位	4位	
生徒C	活動1	勤務時間	給料	人間関係	勤務内容	自分の規準が全て完璧に当てはまるものはない。必ず就職後に問題にぶつかる。
	活動2	勤務内容	人間関係	給料	勤務時間	

生徒Cの授業のワークシートを見ると、順位が逆順になっている(表6)。この生徒のグループは話し合い中で出た意見を、「生活していくために必要なこと」と「働くために必要なこと」と2つに分けている。規準自体は間違っていないが、特に大切な規準は「働くために必要なこと」だと考えたのだろう。振り返りを見ると、選択する際にぶつかる問題、就職後にぶつかる問題に気付くことができています。考えた選択規準を使って2つの職業についてレーダーチャー

トを作ってみると、最大の4になるものがなく、どちらの職業も選べなかったもので、その問題に気付いたのだろう。質問⑧の数値の下降は、やはり職業選択の難しさに気付いたためと考えられる。

V. まとめと課題

本実践では、山田(2011)を参考に作成した希望レベル調査を基にして、生徒の進路選択能力を測ったり、生徒についての考察をしたりして、職場体験活動で関わったり、授業実践を行い、進路選択能力を育成して、自らの生き方を考え主体的に進路選択ができるようにすることを目的として行われた。

希望レベル調査を行うことで、生徒の希望の研修先に対する順位ごとの平均値をだし、そこから生徒 C のように進路選択能力に課題のある可能性のある生徒に目星を付けることができた。これにより、目星をつけた生徒に注意して授業を組み立てたり、関わったりすることができた。これらのことから、この希望レベル調査は、生徒1人1人の進路選択の際の意識を具体的に捉える方法として有効であると考えられる。また、希望レベルや満足レベルを定期的に調査することによって、生徒の職場体験への意欲の変容を測り、気持ちの面や進路選択能力の面で個別の支援が必要な生徒を見つけ出すことができると考えられる。

この希望レベル調査は、今回の様な職場体験活動以外でも、キャリア教育・進路指導に関わって活用できるものだと考える。例えば、高校選択の時の希望調査について、どのくらい高校進学に興味をもっているのか、行きたい高校を見つけることができているのかなどを見ることができると考える。その結果を活用して、生徒に合った具体的な選択肢や選択方法を提示するなど、進路指導の手助けになると考えられる。また、教科係や委員会など、学級の役割決めの際も、どの生徒がどのくらい役割に対して想いをもっているのかを測り、役割決めの際に注意して関わることができると考える。今後の実践によって検証が必要であろう。

また、牛崎(2000)を参考にした、職場体験での学びを基にした進路選択に関わる授業を行ったことによって、興味や関心がある将来の事について、その事に詳しい人と積極的に話したり、聞いたりしようとする進路選択の能力が上がるということが示唆された。また、授業と職場体験活動を連動させたことにより、進路選択能力全体が上がることに、特に、自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、将来につなげようとする進路選択の能力が上がるということが示唆された。職場体験活動と連動した授業実践を行うことで、生徒の進路選択能力を上げることができたと考える。これらの結果は、新学習指導要領で求められる、「組織的かつ計画的な進路指導」が有効であることを確認できたと考えられる。

課題として、授業をやったことによって、有意差は出なかったものの、質問⑥～⑧が授業前後で下がってしまったことが挙げられる。質問⑥「目標があつて何かをする時、見通しを持って計画的に進めたり、そのやり方などの改善を測ったりしようことができますか。」については、将来の職業のことを授業では考えたが、そのために何をするかということまでを考えることができなかったためと考えられる。質問⑦については、授業内容が「職業」ということや「職場体験での学び」を強く意識していたため、生徒の中で学校の学びと離れて考えてしまったことが影響したと考えられる。質問⑧については、具体的に職業を選ぶことについて考えたことで、職業選択やそのための取り組みに難しさを感じたと考えられる。しかし、これらの課題を1回の授業で解決することは、逆に内容の詰め込み過ぎとなってしまう難しいと考えられるので、職場体験活動を含めた、カリキュラム全体で授業構成などを考えていく必要がある。

また、生徒全体や生徒1人1人に対する分析なども課題である。今回は例の生徒 B と生徒 C

についてだけ考察したが、目星をつけた進路選択能力に課題のある可能性のある生徒は他にもいる。さらに、学年全体や授業学級全員の意気込みや振り返りなどについてまだまだ考察・分析の余地がある。希望レベル調査やアンケート調査という量的な調査と、生徒が書いた意気込みや振り返りなど質的な調査とを、目星をつけた生徒を中心に1人1人比較しながら分析を行い、希望レベル調査の効果の検証を行っていききたい。また、意気込みや振り返りをテキストマイニング分析することで、授業や生徒の変容についての主観的な分析と客観的な分析を合わせて行っていききたい。

謝辞

本論文を書くにあたって、長い時間実習を受け入れ、アンケート調査や授業実践を実施させてくださった実習校の先生方に、この場を借りて感謝の意を申し上げます。ありがとうございました。

引用・参考文献

- i 中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(2011)
- ii 文部科学省『中学校キャリア教育の手引き』(2011)p.21,22
- iii 文部科学省『中学校学習指導要領』(2017)p.25
- iv 文部科学省『中学校学習指導要領解説総則編』(2017)p.100
- v 町田尚史・開本浩矢「進路選択能力の構造に関する考察—進路選択能力と進路選択自己効力感との関係—」『商大論集』第67巻第3号(2016)p.15-28
- vi 2017年度A中学校1年生の総合的な学習の時間の教師プレゼンテーションより(2018/2/19)
- vii 山田智之「職場体験活動による中学生の進路成熟及び自立的高校進学動機の変容と影響要因」『キャリア教育研究』第30巻第1号(2011)p.1-14
- viii 牛崎文子「自分で意志決定しようとする意欲を高める進路指導の在り方に関する研究—生徒一人一人に進路選択の規準を考えさせる活動をとおして—」『岩手県立総合教育センター研究集録』(2000) (2018/8/15 確認)
http://www1.iwate-ed.jp/db/db1/ken_data/center/h12_tyou/12_12/12_12.html
- ix 厚生労働省「賃金構造基本統計調査 / 平成29年賃金構造基本統計調査 (順次掲載予定) 一般労働者 職種」https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00450091&tstat=000001011429&cycle=0&tclass1=000001098975&tclass2=000001098977&tclass3=000001098985&stat_infid=000031559736&second2=1 (2018/8/16 確認): このサイトを参考に、ワークシート活動4でリーダーチャートを作った職業のデータを作成。参考文献 x, xi も同様。
- x 進路情報研究会『[2018-2019年版] 中学生・高校生の仕事ガイド』桐書房(2017)p.37,334
- xi 「職業図鑑」<http://aaaaaa.co.jp/job/> (2018/8/16 確認)